

[制作記録]

中空構造による彫刻作品の展開

Approaches of Sculpture Works by Hollow Structure

芝山 昌也

SHIBAYAMA Masaya

はじめに

本稿は二つの作品「ここからは私たちのところ」(2019年~2021年)、「隠れて、もう、みえない」(2021年)の制作記録である。前半は作品の構造面の調査研究について記述し、後半で二つの作品の制作について記述する。この二つの作品に共通するのは、古くから日本に根付いている土着の造形文化と現代彫刻との接触を試みている点と、フレーム構造に布などを取り付けて彫刻の表面を覆っている点である。筆者は近代日本彫刻の研究のなかで、明治以前の日本の造形文化について調査を進めるうちに、このようなフレーム構造による立体造形物に着目していった。その構造を「中空構造」として、その歴史的検証と現状調査を行いながら、それらを組み込んだ彫刻作品の制作実践を進めている。

中空構造

「中空構造」とは内部が空洞になっている立体造形物の構造のことである。内部が空洞の立体造形物は珍しくはない。近代彫刻でよく使われてきた石膏や樹脂で形作られた彫刻も内部は空洞になっている。しかし、ここでは竹やワイヤーなどの線材を格子状に組んで立体の外殻をつくり、それに紙や布、植物などの素材を取り付けてつくられる立体造形物の構造のことを指す。有名なところでは青森のねぶた祭りに登場する造り物とその構造でつくられている。

中空構造を持つ立体造形物のスケール

江戸から明治にかけて、日本各地の見世物小屋や祭礼で見られた一時的な立体造形物には、竹細工や籠細工などの日用品の手わざが応用されていた。それらは軽くて丈夫、さらに技術さえあれば短期間に制作を終えることができた。10メートルを超える立体造形物を一時的な催事のためだけに制作することも珍しくはなかった。とくに巨大な大仏は人気を集めていたようで複数の記録が残っている。その構造は心材に丸太、フレームには竹が多かったが、外側に貼り付ける素材は紙、合羽、漆喰など様々であった。例えば、高村光雲は東京で14メートルほどの大仏を制作しているが、それは丸太に竹を編んで、漆喰を施した物であった。いまでも岐阜市に残されている岐阜大仏(別名:籠大仏)は、建物の柱を支柱にして竹を編み、それに粘土を施して制作されている。岐阜大仏は大仏殿の内部空間に合わせるように、13メートルを超える巨体を器用におさめている。中空構造を持つ大仏は、一時的な見世物である場合が多く、使われた素材も竹や紙が多いので現存するものは少ない。しかし、江戸時代につくられた大仏制作の記録を見るだけでも、人々の目を惹くには十分なスケールを達成していたことがわかる。

中空構造を持つ立体の表面素材

フレームには様々な素材を自由に取り付けることが出来るために、各地で入手しやすい素材を取り付けるなどして、今なお日本の各地でユニークな造形

がつくられている。とくに、熊本県の各地で見られる祭礼の造り物に使用されている素材は多種多様である。例えば、山都町の八朔祭で見られる巨大な大造り物には木の表皮や草、木の実など自然の植物だけが使われる。[図1] 高森町の風鎮祭の造り物は、束子や箒、プラスチックの器、灰皿などの日用品が必ず再利用可能な方法でくくりつけられている。[図2] 熊本県の他の地域でも、自転車の廃タイヤや毛糸など手に入りやすい素材で獅子をつくるなど、ユニークな立体造形物が一般の人々の手によって、現在でも作り続けられている。[図3・4] モチーフは定番の動物や流行のキャラクターが多いが、作り手の工夫は表面の素材選択とその取り付け方法に現れており、毎年のように様々な工夫が加えられている。これらは普通、祭事が終われば壊され、翌年またモチーフを変えて新作がつくられる。それらは祭事の競技となっていることが多く、いまでも地区ごとに腕を競っている。順位をつく競技としての側面が現在でも残っていることが、素材や技術の更新につながっている。



[図1] 熊本県上益城郡山都町の八朔祭における「大造り物」の制作風景 (2018年筆者撮影)



[図2] 熊本県阿蘇郡高森町の風鎮祭における「造りもん」(2019年筆者撮影)



[図3・4] 熊本県宇土市のうと地蔵祭りにおける「造りもん」(2019年筆者撮影)

造形的な制約

江戸末期に見世物文化の花形であった「籠細工」や「生人形」は中空構造で作られている。その延長線上にある祭礼の「つくりもの」には日本的な手仕事を応用した豊かな造形文化が根付いている。しかし、それらは文字通り大衆文化であり、西洋彫刻を起点とする日本の近代彫刻からは遠ざけられていったという経緯がある。いまでも江戸で隆盛を極めた「ハリボテ」「人形」といったキーワードが彫刻から毛嫌いされるのはその理由からである。また、近代彫刻には恒久性という観点も求められた。一時的な「ハリボテ」の立体造形物は一般的には長くは持たない。表面の素材に合羽が使用されていたのは、少しでも長く造形物を持たせるといった狙いがあったからだと考えられる。生人形は室内におさめることが多かったが、劣化は激しかったという。耐久性のない造形物は西洋彫刻の要求には合わなかった。

また「中空構造」をもった造形には制約が多いの

も事実である。フレームに素材を付ける構造のため、使える素材や技術は限られている。想定した形にする為の難易度も高い。しかし、熊本の「つくりもの」のように簡単ではない規模の立体造形物の制作が継承されてきたのは、競技という側面が残っていたことに加え、素材や技術に制限が課されていたことが大きい。素材は地域で入手しやすいものが使われ、技術も人々が良く知る手工芸を起点に発展している。筆者は江戸のちいさな手仕事から発展していった立体造形物に着目し研究を進めており、その成果を作品制作に組み込むことが出来ればと考えている。

「ここからは私たちのところ」の制作記録

「ここからは私たちのところ」はアートプロジェクトおかやまが岡山県美作市で開催した地域芸術祭「美作三湯芸術温度2019」①に出品した野外彫刻作品である。

会場を視察に行くまで作品の構想は白紙の状態であったが、作品を設置する野外空間には山間部と平地を隔てている境界があったので、その地形を生かした作品をプランニングし提案した。作品の形体は全国各地にある道祖神を単純化したものである。それを土地の境界部分に設置し、本来の道祖神の役割についても想起させるようにして、タイトルを「ここからは私たちのところ」とした。私たちのところとは作品の背後に見える山間部のことである。タイトルに「私たち」と入れているのは作品を擬人化させるという意図があり、このようなタイトルを近作には度々使っている。

内部の構造は籠細工を応用して、ドーム状の枠に竹を沿わせながら半球状の立体を三体制作して、積み上げたものである。[図5・図6] 設置場所は台風の通過が予想される地域であり、天候の荒れる時期にも重なっていたので、強度を上げるために幅広の竹を中心に編んでいる。また、本展覧会は約100日間ほど開催されることになっており、芸術祭としては長期間であるので、退色による時間経過を視覚的

にわかりやすく組み込むことにした。竹のフレームに色とりどりの布（着物を裂いた布）を選んで結びつけた。予想通り展示後20日ほどで日光による色あせが見られた。30日を超える頃には相当程度の退色が見られたので、定期的に新しい素材を結ぶこととして、度々会場に足を運んだ。時間経過の異なる古布の積層をみせることにより、展示期間以上の時間の経過を鑑賞者に想起させることができたように思う。本作品は約1年保管して、2021年開催の金沢彫刻祭②に再出品した。その際にも新しい着物の端切れを結びつけ、新しい積層を重ねて展示した。最終的には当初の布の分量のほぼ2倍の量の布を積層させたことになる。



[図5、6] 作品制作の途中経過1、2



[図7] 美作三湯芸術温度における展示の様子



【図8】金沢彫刻祭2021における展示の様子

「隠れて、もう、みえない」の制作記録

「隠れて、もう、みえない」はグループ展「すごもりむしとをひらく」③で発表した作品である。2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で多くの美術展が中止または延期され、筆者もまた発表予定の変更を余儀なくされていた。そのような時期に自主的な企画を実施できたことは、時勢と作品制作の関係性を考察していくうえでは重要だった。

展示会場には金沢市内の古い倉庫を活用することとなった。木造の建屋の特徴をそのまま生かして自然光のみで作品展示を行うこととした。季節柄、夕刻になると暗くて作品が見えにくくなることが想定された。しかし、作品タイトルにあるように、いろんなことが「よく見えないこと」を作品の核心に据えていたので、あえてライティング等で人工的に光量を上げることはしなかった。

本作品は前述の前作に引き続きの「中空構造」の要素を用いることを前提としていた。加えて、日本の各地でみることができると祈りの場の造形から作品を構想したものである。なかでも、自然石や木の棒に布きれを被せたり、結びつけたりする土着の風習に着目していた。それらの観察を進めると、芯になっている石や木が毎年重ねられる布で見えなくなっている場合も少なくないことに気付く。そんな繰り返される習慣のなかで、実際に見えるものと見えないもの、現代社会で見えているものと見えなく

なったものなどの複雑な関係を考えながら作品制作を進めた。

構造は鉄棒によるフレーム構造 [図9・10] で直径約3メートルの背の低い円錐型である。それに大量のネクタイと複数枚の護摩札形状をした杉の板を結びつけてある。[図11・12] ネクタイはすべて裏返しにして素材の用途性を解消しようとした。ネクタイは護摩札の形と似ていて、ネクタイを札（ふだ）の境界を曖昧にするために杉の板を取り付けた。また、全く外からは見えないが、楠で作った球体が作品の中心に設置してある。また、球体の下には1匹分のうさぎの毛皮がひいてあり、それもまた鑑賞者からは見えない。作品上部に同じように1匹分のうさぎの毛皮をゴムロープで吊り下げている。筆者はたびたび毛皮を使うが、これは「動物からの贈与」のメタファーである。これも、私たちからはよく見えない。キャプションは以下のように素材を掲示した。[球状のクスノキ、杉板、ネクタイ、トタン、ラバーゴム、ウサギの毛皮2枚] 注意深くキャプションを読むと、球状のクスノキとウサギの毛皮1枚分が見えていないことがわかる。そのことがタイトルの「隠れて、もう、みえない」と響き合う。



【図9・10】作品制作の途中経過1・2



【図11・12】作品制作の途中経過3・4



[図13・14] 作品設置の途中経過 1・2



[図16] 作品展示の全景



[図15] 展示作品の部分

日本には自然石や木に、布や衣を重ねる風習が多くあります。短い棒に布を刺して重ねたり、石に衣をまわせたり、柱に前掛けを幾重にも結んだり。そんな風にして、先人たちは、至るところに祈りの「かたち」をつくり出してきました。悲しい出来事が身に降りかかったとき、新しい物語が始まり、そこに祈りの「かたち」が生まれています。

そんな物語の多くは、「いつ、誰が、何のために」という由来がはっきりしていません。長い年月のあいだに、石や木が隠れてしまっているものもあります。そんな曖昧なものに人々は布を重ね続けます。過去の他者から引き継がれたものを、未来の他者へと引き継ぐ、そんな人々の時間の意識はどれも長いものです。元の姿が見えなくても、想像力をもって理解する人々の空間の意識はとても広いものです。

各地にある祈りの場を訪れると、わかりやすい共通点があることに気がきます。それは擬人化です。丸い石に前掛けをかける、それひとつで石は人になります。布や衣をまどうのですから当然といえば当然です。どこにもあるような石や木を人のように扱って、祈りの対象に変容させることも、この国の感性です。

擬人化された「かたち」のなかには、畏怖の感情を強烈に運んでくるものがあります。美術にも他者の感情を運ぶことが可能なら、取り組みたい課題です。「かたち」の底に「隠された、なにか」を明らかにすることだけでは感情は運べない気がします。繰り返し蓄積することで時間の意識を少しも長く、みえない他者の痕跡を想像することによって、空間の意識を少しも広く、そして対峙する者の想像力にとく余白を持たせることで、少しは作品に感情を組み込めるのではないかと考えています。

この一年ほどで、私たちの時間の意識は極端に短く、空間の意識は極端に狭くなっていることが見えてしまいました。目にもえないものに想いを馳せる想像力は少しずつ失われています。だからこそ、わたしは「隠された、なにか」をどう扱うか、ということを考えていると思っています。

[図17] 会場に掲示したテキスト

展覧会詳細

① 美作三湯芸術温度2019

主催：岡山県

会期：2019年10月5日(土)～2020年1月13日(月)

会場：美作三湯の宿泊施設等25か所

② 金沢彫刻祭2021

主催：金沢彫刻祭2021実行委員会

会期：2021年8月28日(土)～2021年9月5日(日)

会場：しいのき緑地、金沢21世紀美術館広場、金沢市役所前広場、金沢市役所第一本庁舎、香林坊地下広場、金沢学生のまち市民交流館

③ すごもりむしとをひらく

参加者：芝山昌也、宮永春香、加賀城健

会期：2021年3月17日(水)～3月28日(日)

会場：鍛冶町倉庫（金沢市安江町）

（しばやま・まさや 彫刻／彫刻）

（2021年11月5日 受理）